

わたしに問わなかった者たちに、わたしは尋ねられ わたしを捜さなかった者たちに、見つけられた

第197号

イザヤ 65:1

平成24年2月24日

私たちが祈り場に行く途中、占いの霊につかれた若い女奴隷に出会った。この女は占いをして、主人たちに多くの利益を得させている者であった。彼女はパウロと私たちのあとについて来て、「この人たちは、いと高き神のしもべたちで、救いの道をあなたがたに宣べ伝えている人たちです」と叫び続けた。幾日もこんなことをするので、困り果てたパウロは、振り返ってその霊に、「イエス・キリストの御名によって命じる。この女から出て行け」と言った。すると即座に、霊は出て行った。彼女の主人たちは、もうける望みがなくなったのを見て、パウロとシラスを捕らえ、役人たちに訴えるため、広場へ引き立てて行った……長官たちは……ふたりを牢に入れて、看守には厳重に番をするように命じた。この命令を受けた看守は、ふたりを奥の牢に入れ、足に足かせを掛けた。真夜中ごろ、パウロとシラスが神に祈りつつ賛美の歌を歌っていると、ほかの囚人たちも聞き入っていた。ところが突然、大地震が起こって、獄舎の土台が揺れ動き、たちまちとびらが全部あいて、みな鎖が解けてしまった。目をさました看守は、見ると、牢のとびらがあいているので、囚人たちが逃げってしまったものと思い、剣を抜いて自殺しようとした。そこでパウロは大声で、「自害してはいけません。私たちはみなここにいる」と叫んだ。看守はあかりを取り、駆け込んで来て、パウロとシラスとの前に震えながらひれ伏した。そして、ふたりを外に連れ出して、「先生がた。救われるためには、何をしなければなりませんか」と言った。ふたりは、「主イエスを信じなさい。そうすれば、あなたもあなたの家族も救われます」と言った。そして、彼とその家の者全部に主のことばを語った。看守は、その夜、時を移さず、ふたりを引き取り、その打ち傷を洗った。そして、その後ですぐ、彼とその家の者全部がバプテスマを受けた。使徒の働き 16:16-34

キリストを信じる信仰による救いとは、どのようなことでしょうか。意外なことに、キリスト教界において、救いの定義はあいまいで、キリスト教やカトリック教という宗教の教理遵守や儀式遂行を救いの条件に加える教えが公然と語られているようですが、果たして、「罪人」が救われるのは、教理、儀式、善行など人間のわざによってでしょうか。西暦一世紀にキリストが弟子たちに語られた原始福音は、時代とともに、人間が組織だてた宗教に置き換えられて今日に至っており、キリストの十字架刑による死の重大な意味が、人間のわざを加えることではぐらかされてきています。今月は、洗礼、バプテスマの意味を聖書から、吟味することにしましょう。

「救われるためにバプテスマを受けなければならないだろうか」という質問に、聖書はどのように答えているのでしょうか。聖書の答えは、「信じて救いを得た者がバプテスマを受ける」ということで一貫しています。洗礼は救われるための条件ではなく、しるし、確証ということです。キリストは弟子たちへの大宣教命令でこのことを明白に、「あなたがたは行って、あらゆる国の人々を弟子としなさい。そして、父、子、聖霊の御名によってバプテスマを授け(なさい)」(マタイ 28:19、下線付加)と語られました。御言葉を聞いて救われた後、洗礼が授けられるのです。言い換えれば、洗礼は救いに伴われるこの世の儀式で、救いの条件ではないということです。カトリック教の信仰問答書は、主ご自身、バプテスマが救いのために必要であると明言された、また、バプテスマによってすべての罪が赦されると、記していますが、聖書のどこからもその根拠を得ることはできません。あえて挙げるとすれば、「人は、水と御霊によって生まれなければ、神の国に入ることができません」(ヨハネ 3:5)がよく引き合いに出されるようですが、これは、人はだれでもこの世に誕生するためにまず水から生まれるが、生まれた後、聖霊による生まれ変わりがなければ、永遠の生命に入ることはできないと捉えることのできる聖句で、水によるバプテスマが救いの条件であることを語っていると捉える必要はないのです。むしろ、百以上に及ぶ圧倒的多数の聖句は、明白に信仰のみによる救いを説いています。キリストの大宣教命令をマルコは「全世界に出て行き、すべての造られた者に、福音を宣べ伝えなさい。信じてバプテスマを受ける者は、救われます」(16:16)と記していますが、明らかに強調は聞いた福音を信じることで、洗礼は信じた者のしるしにすぎないのです。

ローマ・カトリック教会の修道僧であったルターは、信者の目を聖書に向ける画期的な宗教改革をひき起こしましたが、洗礼に関してはカトリック教の教理を引き継ぎ、プロテスタントの諸教派にもその影響が見られます。キリストが語られた「福音」の中に果たして洗礼が入っているかどうかを知ることは、救われるために何を聞けばよいのかに関わってくるので、重要です。異邦人宣教の担い手、パウロは「キリストが私をお遣わしになったのは、バプテスマを授けさせるためではなく、福音を宣べ伝えさせるためです。それも、キリストの十字架がむなしくならぬために、ことばの知恵によってはならないのです。十字架のことばは、滅びに至る人々には愚かであっても、救いを受ける私たちには、神の力です」(コリント人第一 1:17-18)と言い、救われるための福音の言葉「…キリストは、聖書の示すとおり、私たちの罪のために死なれたこと、また、葬られたこと、また、

聖書の示すとおりに、三日目によみがえられたこと、また、ケパに現れ、それから十二弟子に現れたことです…」(コリント人第一 15:1-11、下線付加) を伝えました。強調は明らかに、宗教の教理ではなく、神の靈感によって書かれた聖書にすでに記されていること、神ご自身のメッセージで、実際、御言葉がキリストにおいて成就したことを直弟子はじめ多くの目撃者たちが証したのでした。聖書という神の言葉によって裏づけられて初めて、甦りはじめ前代未聞の奇蹟が神からのものであることが、立証されたのです。「クリスポとガイオのほかにステパノの家族(のどれか) …覚えはありません」と、パウロは自分がほとんどだれにも洗礼を授けなかったことを明らかにし、愛弟子ヨハネは、キリストご自身も洗礼を授けられなかったと、福音書の中で記しています。世の唯一真の救い主であるキリストがあえて洗礼を授けられなかったということは、洗礼が救いに必要な条件ではないことを明らかにされるためであったのかもしれませんが。パウロは「福音によって、キリスト・イエスにあって、あなたがたを生んだ」(コリント人第一 4:15) ことによって、自分が多くの信者の「父」になっていますが、人々に信仰、救いをもたらしたのは儀式や善行ではなく、福音であること、人々は福音によって魂の救いを得、生まれ変わることを明白にしているのです。パウロは、洗礼を授けたことで多くの信者の父になったとは、決して言っていないのです。明らかなように、バプテスマは人を救うことはできません。しかし、キリストを受け入れ、信じ、救いに与った者が、その感動、喜びを公に宣言し、公に「イエス・キリストが、私の代わりに十字架にかかってくださったこと、葬られ、甦られたことによって、私を罪から解放してくださったことを信じ、一生、キリストに献身すること」を証する儀式、場が、水によるバプテスマなのです。

水のバプテスマや聖餐式などを「儀式を通して生じる霊的な力に与る」神秘的なもののみならず、昨今、ちまたで好まれているニュー・エイジ的な発想に近い教えが、カトリックはじめ、プロテスタントの一部の教派でも依然として支持されているようですが、これらの儀式が象徴的なものにすぎないことは、聖書で「水」や「ぶどう酒」、「パン」に何が象徴されているかを知れば明らかです。このことは紙面の都合上、次号で取り扱うことにして、冒頭に引用した聖句に関連して、中国伝道で起こった実話に移りたいと思います。迫害の中で福音宣教するとき、神の驚くべきご介入が起こり得ることは聖書が証しし、今日でも多くの例証を挙げることができですが、半世紀前の1960年代後半、中国伝道に献身した米国のある宣教師が、布教に反対した中国の警察に何度も捕まり、ついに死刑宣告がなされました。死の前に、「おまえが唱えている十字架を、この紙から一回だけまっすぐにハサミを入れて作ったら、生命を助けてやろう」と言われ、一枚の長方形の紙が差し出されました。宣教師は主に祈り、聖霊が示されるままに紙を折り、聖霊が「切れ!」と命じられたところで、思い切って一直線にハサミを入れました。大小さまざまな形の紙の切れ端の中から、大きな紙片を取り上げ、開いて見ると、何と見事な十字架が現れたのです。注目していた人々の中にざわめきが起り、その場にいた人々はひとり残らず、イエス・キリストを救い主、真の神として受け入れたのでした。しかし、もしこの奇蹟がこの十字架が現れたという現象だけに終わっていたとしたら、そのときは目前に見た奇蹟に驚嘆して、簡単に奇蹟の神を信じた者も、ときが経つにつれて信仰から離れていったことでしょう。この話を知ったとき、十字架が他の方法でも作れるに違いないと思った私は、まず、ハサミを一直線ではなく一続きで一回入れることにより、左右対称の見事な十字架を切り取ることができることに気がつきました。さらに、ずばり一直線で、紛れもない十字架を切り取ることができることも分りました。しかも、長方形でなく、正方形の紙からも切り取れることが分かったのです。このとき思い起こされたのは、モーセがエジプトのパロの前で神の奇蹟を行ったとき、エジプトの魔術師たちも同じような真似ごとをしたということでした。その源が神かサタンかを現象だけから判断することは難しいのです。実際、聖書は、サタンも奇蹟や癒しを行う力があることを教えています。ですから、その現象に神の言葉、聖書に裏づけられるメッセージが伴わなければ、あっと驚く出来事が起こって、それを伝えても何の意味もないのです。

さて、この宣教師が十字架を切り取った後、聖霊は引き続きメッセージを語られ、十字架の形以外の紙片をすべて余すことなく集めて組み合わせると、「**死亡**」(「死」は肉の滅び、すなわち第一の死で、「亡」は霊の滅び、すなわち第二の死) という熟語、あるいは、英語の「**HELL (地獄)**」という言葉がつけられることを示されたのでした。十字架のない人生はまさに死に向かっている滅びの人生であることが、漢字と英語を通して示されたのです。人々がかたずをのんで、驚くべきメッセージを目と耳で聞くなか、聖霊は宣教師に、再び先ほどの十字架の形の紙片をも戻して、全部の紙片を組み合わせよう語られました。そこで促されるまま、宣教師が組み合わせると、何と「**永生**」(永遠のいのち) という熟語が現れたのです。それは、神への反逆(神の存在を否定し、自分本位の人生を正当化する生き方)のゆえに滅び(肉と霊の死)に向かっている私たちの人生に、イエス・キリストの十字架上での贖い、罪の赦しがもたらされるとき、神と和解され、神とともに永遠に生かされることになるという、紛れもない福音のメッセージでした。人の罪を全部背負って罪人として身代わりに死んでくださったキリストの二千年前の「復活」の史実(「一人で学べるルカの福音書」補注14参照)は、信じる者へのこの約束の確認です。「救われるためには、何をしなければなりませんか」の答えは、福音を信じることです。その瞬間、だれでも「御子を信じる者は永遠のいのちを持つ」(ヨハネ 3:36)と約束された道を歩み出すことになるのです。